

# 独房の半世紀

あなたは、その時間を  
想像することが出来ますか？

# 約束

名張毒ふどう酒事件 死刑囚の生涯

仲代達矢 樹木希林 天野鎮雄 山本太郎 ナレーション:寺島しのぶ

監督・脚本:齊藤潤一

製作:坂中幹男 宮多功 音楽:木多俊之 音楽プロデューサー:岡田正史 撮影:坂井洋紀 照明:角川謙彦 録音:遠藤淳  
美術:高宮祐一 記録:前田節記子 題字:山本史風 音響効果:久保田吉伸 編集:明田 繁 助監督:井羽高哉 監修:門脇康郎 プロデューサー:阿武野謙彦  
製作・配給:東海テレビ放送 配給協力:東風 2012年11月20分(11月16日)日本

[www.yakusoku-nabari.jp](http://www.yakusoku-nabari.jp)

無実を叫び続けている。  
ずっと。  
そして、こぼれ。



**半世紀近く**拘置所に閉じ込められている奥西さんの心境は測りしれません。私がこの状況に追い込まれたらどうなるか、そういう気持ちで演じました。60年俳優をやってきた中で、私にとつて記念碑的な作品です。

### 仲代達矢

**必ずや生き抜いて**濡れ衣を晴らしてやる――

奥西勝さんのこの強い信念が、

仲代達矢さんの肉体を通じて、ぐいぐいと迫ってきます。息子の無実を信じ、帰ってくる日を待ちながら手紙を書き続ける母タツノさん。

樹木希林さんの姿を借りて蘇る、切々たる母の思いに、涙がこぼれます。

裁判所や検察は、奥西さんの獄中死を

待つているのかもしれませんが、そんな不正義は絶対に許さない。

映画を見て、この思いを新たにしました。

### 江川紹子

シナリオスト

**想像してほしい。**

無実の罪で半世紀も自由を奪われた「人間」の苦悩を。息子を信じ続けた「人間」の孤独を。

圧倒的な取材力とリアリティ、

そして素晴らしい俳優さんたちの演技に魂を揺さぶられ、涙が止まらなかった。

冤罪を生んでしまうのも「人間」であり、その所業にたとえようのない恐ろしさを感じてしまう。ぼくは、同じ「人間」として言います。

「奥西さんを獄中で死なせてはいけません!!」

### 郷田マモラ

監修家／あしひらみちこ

**日本の刑事司法**がこれほどに歪みきつた

要因のひとつはメディアにある。

ならばメディアには期待できない。僕も含めてそう考えてしまう人たちは、絶対にこの作品を観るべきだ。

メディアはここまでできる。これほどに強い力を持つ。一貫して司法の歪みを問いつける。

阿武野プロデューサーと齊藤監督は、

また新しい地平を拓いた。見事だ。

正直に書けば嫉妬するけれど、でも認めないわけにはゆかない。

彼らは仕事を終えた。次は観た側が動かなければ。

### 森達也

映画監督・作家



何度裏切られても、彼は信じ続ける。

裁判所が事実と良心に従つて、

無実を認めてくれると。

獄中から無実を訴え続けている死刑囚がいま

す。奥西勝、86歳。昭和36年、三重県名張市の小さな村の懇親会で、ぶどう酒を飲んだ女性5人が死亡しました。「名張毒ぶどう酒事件」です。奥西は一度は犯行を自白しますが、逮捕後、一貫して「警察に自白を強要された」と主張、1審は無罪。しかし、2審で死刑判決。昭和47年、最高裁で死刑が確定しました。

戦後唯一、無罪からの逆転死刑判決です。

事件から51年――際限なく繰り返される再審請求と棄却。その間、奥西は2桁を越える囚人が処刑台に行くのを見送りました。いつ自分に訪れるかわからない処刑に怯えながら。あなたは、その恐怖を、その孤独を、その人生を、想像することができますか？

これは、冤罪ではないか。

司法は、

獄中死を望んでいるのか？

事件発生当初から蓄積した圧倒的な記録と証言を再検証し、本作を作り上げたのは、「平成ジレンマ」「死刑弁護人」の齊藤潤（監督）と阿武野勝彦（プロデューサー）。これは、東海テレビ放送の名物ドキュメンタリー「司法シリーズ」を手掛ける二人が、カメラが入ることが許されない独房の死刑囚を描き出す野心作である。

そして、奥西勝を演じるのは日本映画界の至宝、仲代達矢。息子の無実を信じ続ける母・タツノ役に、樹木希林。ナレーションをつとめるのは、寺島しのぶ。

そう、本作は映画とジャーナリズムが日本の司法に根底から突きつける異議申し立てだ。

www.yakusoku-nabari.jp

原作本：東海テレビ取材班『名張毒ぶどう酒事件 死刑囚の半世紀』（岩波書店刊）2013年2月15日刊行

